

## 1. 古墳の概要

頂上部や丘陵部は、後世に、かく乱や地すべりの影響を受けているため古墳の形ははっきりとしません。

頂上部の地山面からは墓壇を検出しました。墓壇は北北西に軸が向いています。大きさは、長さ4.8m、幅1.0m、深さは30cmが残存しており、底面に5~10cm大の扁平な礫を長さ4.5m、幅0.5mの範囲に敷いています。この礫床の北側の端と、そこから約1.0m南側の部分では底面に敷かれた礫がやや高くなっていることが特徴です。墓壇を掘った後に組合せ式の木棺を据え、底面には礫を敷いていたものと考えられます。

遺物は刀子が礫床の上から1点出土し、主体部を覆っていた土からは古墳時代前期末頃から中期初頭頃にかけての土師器が1点出土しています。

間谷東古墳は、埋葬施設の形態や出土遺物から判断して古墳時代前期末から中期初頭頃のものと考えられます。

## 2. まとめ

出雲平野では古墳時代前期から中期初頭の古墳の類例は山地古墳、浅柄Ⅱ古墳や大寺古墳などと少なく、この地域で古墳時代中期前半の首長墓と考えられている北光寺古墳の出現に至るまでの新たな資料となり、当時の様相を知る上で貴重な発見となりました。

また、近隣に位置する山地古墳、浅柄Ⅱ古墳と似たような礫敷きの埋葬主体であることは、この時期の神西湖東岸周辺に分布する古墳のひとつの特徴を現しているとも考えられ注目されます。

